

【第15回年次大会 基調講演 要旨】

音楽にジェンダーはあるのか？

中村美亜

音楽にジェンダーはあるのか？ —— 『男の歌』『女の歌』はあるし、『男らしい音楽』『女らしい音楽』もある気がするから、音楽にジェンダーはある。そう思う人はいるだろう。その一方で、「歌詞に男女があっても、メロディーに男女はない。音楽とジェンダーを結びつけるなんて馬鹿げている」。そう考える人もいるはずだ。しかし、ジェンダーという概念が発展した経緯を思い返すなら、また音楽体験とは何かを改めて問うてみるなら、「ある」「ない」と一言で即答できる問題ではないことにも気づくだろう。本講演では、さまざまな例を見ながら（聴きながら）、音楽とジェンダーの関わりを探っていくこととした。

まずジェンダーの意味を確認するなら、ジェンダーとは、社会的次元で人間を男女に二分する方法およびそれによる性別を指す。人間は（全員ではないが、多くの人が）子供を産む側の人と産ませる側の人に分かれ、身体的に（生殖機能をめぐって）女・男の性別に二分される。この性別を、英語の用法に倣って「セックス」と呼ぶ。しかし、これとは別の社会的次元（たとえば髪型などの外見、仕草や振る舞い、職業などの社会的役割）でも、人間は男女に二分される。これが「ジェンダー」と呼ばれるものである。

ジェンダーはセックス（身体的性別）に由来するが、その結びつきに必然性があるとは限らず、実際には、むしろ社会規範として存在する。人々は社会生活において「ジェンダー化」にさらされ、「ジェンダー規範」に左右されつつ生を全うしているのである。「ジェンダー化」や「ジェンダー規範」は、すべてが悪とは言いきれないものの、自分の可能性に挑戦する生き方を阻む傾向にあり、個人の自己効力感を奪い、社会的な不平等を助長することも少なくない。そんな中で、ジェンダーへの意識は、人々を性別役割の呪縛から解放し、性別によって生じる社会的な不平等を是正する契機を生む。

それでは、このジェンダーは音楽とどう結びつくのだろうか？ いくつか例を挙げてみよう。①作曲家や演奏家など音楽の担い手の性別、②（歌の場合）歌詞が示唆する性別、③声部（ソプラノやバスなど）、④音楽の専門概念（男性終止・女性終止など）、⑤音楽についての描写や解説。これらの例から示唆されるように、音楽におけるジェンダーは、その音楽が置かれた時代や地域の社会的規範を反映している。その証拠に、社会的状況が変われば、音楽におけるジェンダー規範も変化する。たとえば、①女性指揮者や女性ドラマーの出現、②自立的な女性を描いた歌詞の登場など。このように音楽のジェンダー化は、音楽以外の社会的な規範と深く結びついており、それに大きく左右される。

しかし、その一方で、音楽的事象はジェンダー規範を越境し、攪乱することもある。「性別越境パフォーマンス」（Cross-Gender Performance : CGP）と呼ばれるものである。たとえば、①演歌におけるCGP、②オペラにおけるCGP、③ソプラニスタの歌唱などである。これらの例から、次の二点が浮かびあがる。(1) ジェンダー規範を超えた表現は、個別性が希薄化するため、普遍性と結びつきやすい。その一方で、(2) ジェンダー規範を模倣する表現は、ジェンダー規範を強化するが、模倣が過剰になった場合は、逆に滑稽さを暴き出す。

以上からわかるように、音そのものにジェンダーはない。音楽を音響現象と捉えるなら、その音響現象にジェンダーは存在しない。しかし、音響現象を生み出し、それを受容する人間は、ジ

エンダーと不可分な存在であり、それ故に、音響現象にさまざまなジェンダー的意味を埋め込み、読み取っている。つまり、音響現象にジェンダーはなくても、私たち人間がジェンダーとは無縁ではいられないため、音楽にジェンダーはないとは言い切れないのである。

ただし、もう少し丁寧に眺めてみると、音楽のもつ別の側面も見えてくる。私たちは夢中になって音楽に合わせて身体を動かしている間、あるいは音楽に感動して我を忘れている間、ジェンダーを意識することはない。人間は、音響現象に身を任せている状態（音響体と自分が同一化している状態）において、日常世界とは異なるいわば「ジェンダーレス」の次元に身を置くことができるのである。

とはいえ、我に返った瞬間、その体験を言葉で語ろうとしたその瞬間、私たちは再びジェンダーのある世界へと連れ戻される。ジェンダーとは無縁だった音楽体験も、言語化の過程でジェンダー的に再解釈されるのである。言い換えるなら、音に意味付けをするどのような言語実践が存在するか、ということが音楽の意味決定に深く関わっているのである。テレビ・コマーシャルに端的に表れているように、音響現象としての音楽が、その内容とは別次元で人々を情緒的に揺さぶることができるのなら、音楽のもつ洗脳性と言語実践におけるジェンダーの関係は、決して看過できるものではないだろう。

[参考文献]

- カーマン・ジョゼフ他 (2013) 『ニュー・ミュージコロジー：音楽作品を「読む」批評理論』 福中冬子訳・解説，慶応義塾大学出版会。
- 北川純子編 (1999) 『鳴り響く性：日本のポピュラー音楽とジェンダー』 勁草書房。
- 中村 美亜 (2008) 『クィア・セクソロジー：性の思い込みを解きほぐす』 インパクト出版会。
- 中村美亜 (2008) 「トランス・ポリティクスの可能性：オペラと宝塚における異性装をめぐるジェンダー・身体・認識論的考察」，『立命館言語文化研究』 20 (1), 241-265.

(なかむら みあ・九州大学准教授)